

第 1 回 長崎と韓国カトリック教会 日本カトリックの再宣教に韓国が関わっていた！

【要旨】

フランシスコ・ザビエルが 1549 年に来日し、カトリックを伝えたことはよく知られていますが、その一方で‘日本カトリックの再宣教’についてはいかがでしょうか？『新カトリック大事典』には次のように記されています。

19 世紀半ば、パリ外国宣教会は日本再宣教を目指し、1844 年末に会員のフォルカードが那覇への上陸を果たした。ローマの教皇庁は日本宣教の可能性と重要性を考慮し、禁教令下で途絶えていた教区復活を決定、1846 年（弘化 3）に日本を代牧区とした。

まず、フォルカードが上陸したのは琉球王国です。それから、当時、琉球は教会行政上、朝鮮カトリック教会（朝鮮王朝時代なので、‘朝鮮’を用いています）の教区長の管轄下にありました。ちなみに、朝鮮カトリック教会もパリ外国宣教会が担っていました。そして、フォルカードの来琉から 2 年後の 1846 年、教皇庁は琉球を朝鮮教区長の管轄から切り離し、日本本土と合わせて日本教区を設立、フォルカードを初代の教区長に任命します。

その後、琉球での宣教活動がままならないことから、いったん宣教師は琉球から離れますが、数年後、再び琉球に入ってきます。後年（1863 年）、長崎に来ることになるフューレ神父やプティジャン神父も琉球に滞在し、日本本土に上陸する機会を待つことになります。そして、1858 年（安政 5）に調印された日仏修好通商条約により、翌 1859 年、初代駐日フランス総領事デュシェーヌ・ド・ベルクールの日赴任にともない、パリ外国宣教会のジラル神父が駐日フランス総領事館の通訳官兼カトリック司祭として日本の土を踏むことになります。

今回の市民セミナリヨでは、日本カトリックの再宣教につき、パリ外国宣教会の宣教師たちが日本本土に到達するまでの時期を中心に、朝鮮カトリック教会との深い関りを交えながらご紹介しようと思います。